



Global Network
on Extremism & Technology

ミームはできる？（その方法は？） 3つの反動的インターネット ミーム・サブカルチャーの比較分析

ハンプトン・ストール、ハリ・プラサッド、デイビッド・フォーラン

エグゼクティブサマリーと概要

GNETはロンドン大学キングスカレッジの *International Centre for the Study of Radicalisation* (ICSR: 過激化研究国際センター) が取り組む特別プロジェクトです。

本レポートの著者はハンプトン・ストール、ハリ・プラサッド、デイビッド・フォーランです。

Global Network on Extremism and Technology (GNET: 過激主義とテクノロジーに関するグローバルネットワーク) はテロリストのテクノロジー利用の理解と対抗措置のために業界が資金提供する独立したイニシアティブ、Global Internet Forum to Counter Terrorism (GIFCT: テロリズムに対抗するためのグローバルインターネットフォーラム) の支援を受けた学術研究のイニシアティブです。GNET はロンドン大学キングスカレッジの戦争研究学部の学術研究センター、International Centre for the Study of Radicalisation (ICSR) により召集され、統制されます。本文書に含まれる見解と結論は著者の見解と結論であり、明示、暗示を問わず、GIFCT、GNET または ICSR の見解と結論を代表するものではありません。

お問い合わせ

ご質問、お問い合わせおよび本レポートの追加コピーに関しては以下にお問い合わせください。

ICSR
King's College London
Strand
London WC2R 2LS
United Kingdom

T. **+44 20 7848 2098**
E. **mail@gnet-research.org**

Twitter: **@GNET_research**

本エグゼクティブサマリーと概要は複数の言語（アラビア語、英語、フランス語、ドイツ語、インドネシア語および日本語）で提供されています。GNET のその他の出版物同様に、これらおよびレポート全文（英語のみ）は GNET のウェブサイト www.gnet-research.org から無料でダウンロードできます。

エグゼクティブサマリー

ミームはネット上の言説の主流となり、その画像や動画はしばしば大衆文化に深く浸透するようになった。ミームはそれを使用するコミュニティ同様にバラエティーに富んでいる。当然のことながらミームは政治的言説にインパクトをもたらし、今やソーシャルメディア利用者が特定の問題に関する論評としてますます使うようになり、政治家の間でさえシェアされるようになった。ミームは強硬派の政治組織がそのメッセージを世界中に広めるために利用されてきた。これには周縁的な存在のグループや政敵を標的にし、時折暴力を奨励するメッセージの拡散が含まれる。

本レポートではネット上の存在感が高い3つの反動的サブカルチャーについて考察する。収集したミームに混合法アプローチを使うことにより、著者はFacebook, Twitter, Telegram およびミームの総合的画像ホスティングサイト上で入手でき、頻繁に利用されている一般的コンテンツから3つの反動的コミュニティのミームを100本選び、分析した。これらのミームにはインドのヒンドゥトヴァ運動、主に米国在住の視聴者向けのネオ・ナチおよび米国のウィスコンシン州で起きたカイル・リットンハウス発砲事件を中心に作られたミームが含まれた。著者はそれによって明確で結合力のある反動的国家主義運動（ヒンドゥトヴァ運動）、無秩序で共通点がなく悪意に満ちたプロパガンダと過激化のネットワーク（ネオ・ナチ）、米国で起きた発砲事件に関する反動的なミーム環境によって生成されたミームの内容の相違点について調査する。

最初のケースではヒンドゥトヴァ運動支持者間で共有されるミームについて調べる。ヒンドゥトヴァ運動によるソーシャルメディア利用、特にその「IT支部」または電子部隊は明確に記録されている。ヒンドゥトヴァ運動およびその政党の支持者間で共有されるミームはヒンドゥー教徒が危険な状態にあると示唆するミームでこの運動のメッセージを強調する。事実、ヒンドゥー教徒とインドは反インド勢力と共謀する国際的な活動家、キリスト教徒、インドの与党であるインド人民党（BJP）の政敵、そして特にイスラム教徒などの様々な勢力に包囲されているとしばしば描写される。100本のミームのうち、52本はイスラム教徒に焦点が絞られている。

2016年以來、米国在住の様々なファシスト集団（国民社会主義の政治的詳細との類似性により、ここでは「ネオ・ナチ」と言及される）の間で共有されるミームは学術的な関心の対象となった。特に、反語の使用は暴力への呼びかけを「深刻ではない」と正当化するための隠れ蓑となっている点が調査された。標的のアウトグループがイスラム教徒だったヒンドゥトヴァ運動の場合と異なり、ネオ・ナチのミームの標的はより多様で、黒人、LGBTQグループ、ユダヤ人、米国の州そして特に女性を含んでいる。また、ネオ・ナチのミームは極右派と関連した文化人や、伝統的に反動的または超国家主義政府と関連付けられた歴史上の人物に焦点を絞る傾向がある。

リットンハウスの場合は重大な事件を中心とするミームコミュニティを代表していると言う点でユニークである。様々な運動が共通の問題に関して合同することにより、ミーム制作者は独自の政見を織り込み、主題を独自の問題と結びつけられるようになった。カイル・リットンハウス事件に関するミームは暴力に対して最も支持的で、その標的には共産主義者やブラック・ライブズ・マター運動が含まれている。また、リットンハウスのミームコミュニティは独自の意見を高め、正当ではない、または

自らの価値観に反すると見なされる意見を非難しようとするミーム制作者が競い合うコミュニティでもある。

本レポートではインターネットの一般フォーラムから収集した300本のミーム（各事件に関する100本のミームをより広範なデータからランダムに選択）を分析する。著者は主題別のミーム数（例えば政治または文化などのミームの主題の志向）、特定されたアウトグループ（言説の標的となるグループ）および暴力との関係（ミームは特定のアウトグループに関する暴力を支持または非難するか）という3つの主なカテゴリーに基づいてミームを評価し、分類する。著者はこれらのカテゴリーをコーディングした後、各政治的集団におけるミーム拡散の性質を分析する。限定的なサンプル数からは被害者意識の重要視、ヒンドウトヴァ運動のミームのメッセージがイスラム教徒がいかにヒन्दゥー教徒を危険にさらすかに焦点を絞っていること、そして米国の異なる反動的グループによる暴力の美化など、いくつかの興味深い調査結果が得られた。限定的なサンプル数にもかかわらず、調査の対象となったミームは問題のグループのメッセージがより広範な視聴者に簡単に読まれる理解しやすい画像に組み入れられていることを示している。

概要

本 レポートでは各グループに所属する人々が頻繁に利用するソーシャルメディアサイトから集めたデータに基づいてネット上の3つの社会政治的グループ間で拡散されるミームを分析する。これらのグループはインドのヒンドウトヴァ運動支持者、米国のネオ・ナチ、2020年後期のリットンハウスを擁護するコミュニケーション参加者を含む。¹ 著者はイデオロギーの類似性、人種に基づいた国家主義、各国における政治的暴力との密接な関連に基づいてグループを選択した。

著者が最初に分析したミームはインドの政治グループ、ヒンドウトヴァのミームである。ヒンドゥー教徒の国家主義としても知られるヒンドウトヴァは、インドは他の宗教以上にヒンドゥー教のための母国であるべきという民族宗教イデオロギーのことである。ヒンドゥー教とヒンドゥー教徒を重要視しているにもかかわらず、ヒンドウトヴァの信奉者はヒンドゥー教徒をただの宗教グループではなく、ヒンドゥー教がヒンドゥー教徒とインド国家における母国の信仰、シンボルおよび文化を包含する人種と見なしている。この人種概念によりキリスト教とイスラム教はヒンドゥー教徒に強制的に押し付けられた外国の信仰および文化であり、これらの信仰の信奉者の忠誠心はヒンドゥー教国家を表すヒンドゥー教のシンボルではなく他の国にあると見なされている。² ちなみに、ヒンドウトヴァ運動に参加した最初の知識人、ヴィナーヤク・ダーモードル・サヴァルカルは無神論者であった。この運動はイデオロギーの信奉者の多くがヒンドゥー教国家の設立を呼び掛けたインドの植民時代後半に始まった。特に彼らはイスラム教とキリスト教をインドの価値観に反するものと見なし、キリスト教徒とイスラム教徒の国家への忠誠心と献身はいくらよく見ても疑わしいと見なされた。³ インド独立の初期、この運動は主にガンジーは1948年、ヒンドウトヴァに暗殺されたという事実により周縁化された。当初の周縁化やインドの主流メディアに対する左派自由主義のヘゲモニーなどの要因により、ヒンドウトヴァ運動の様々なグループは代替りのプラットフォームを求め、そのメッセージを広めるために新しい技術を利用することを学んだ。⁴ インターネットやソーシャルメディア上のヒンドウトヴァの存在はインドのその他の政党や運動と比較すると特に強大である。ヒンドウトヴァは1990年代に政治の舞台で主流となり、今やその政党、インド人民党 (BJP) はインドの与党である。⁵ このためヒンドウトヴァは独特の有利なポジションを占めている。この運動は現在伝統的なメディア、ソーシャルメディア、地上の政治的行動における言説の多くを支配している。ヒンドウトヴァはそのアイデンティタリアンの焦点と国家勢力へのアクセスによりこの調査で重要である。

1 Eviane Leidig, "Hindutva As a Variant of Right-Wing Extremism", *Patterns of Prejudice* vol. 54, no. 3 (2020), <https://doi.org/10.1080/0031322X.2020.1759861>.

2 参考文献 Christophe Jaffrelot, *The Hindu Nationalist Movement in India* (New York: Columbia University Press, 1996), 11-75; Chetan Bhatt, *Hindu Nationalism: Origins, Ideologies, and Modern Myths* (Oxford: Berg, 2001), 77-111.

3 Jaffrelot, *The Hindu Nationalist Movement in India*, 11-75.

4 Rohit Chopra, *The Virtual Hindu Rashtra: Saffron Nationalism and New Media* (New York: HarperCollins, 2019).

5 Milan Vaishnav および Jamie Hinton 共著, "The Dawn of India's Fourth Party System", *Carnegie Endowment for International Peace*, 2019年9月5日, <https://carnegieendowment.org/2019/09/05/dawn-of-india-s-fourth-party-system-pub-79759>.

分析を行った2番目のグループ、ネオ・ナチは多くの敵対者と社会的な不満を持つネット上のファシストコミュニティである。⁶ ここで行った調査は主に2016年のオルタナ極右とその後の進化から出現したネオ・ナチの集まりに焦点を絞っているが、この集まりからオンライン、オフラインで複数のネオ・ナチ・アクティヴィズムのセクトが生まれた。⁷ ここで調査したのは不条理主義者の「衝撃」ネオ・ナチのコンテンツ、加速主義者の超暴力的なネオ・ナチ、ラテン系のネオ・ナチのカソリック教徒の発信、白人至上主義者を含み、そのすべてが米国の視聴者に直接話しかけている。これらのグループは重複することがあるが、しばしば党派心が強く、相互、特に彼らの政見を明白に支持しない保守派や自由意志論者と競い合っている。ネオ・ナチはその非常に暴力的なレトリックと秘密の組織化により、この調査の鍵である。⁸ 彼らはオフラインの環境ではしばしば内密に行動するか、匿名性を求めるが、暴力をふるうことを恐れず、敵対者または反対派とみなす者に直接傷害を与える。⁹ この環境内で一部の関係者は権力やリソースを手に入れるが、通常は自らの信念を公開せずにこれを行う。¹⁰

カイル・リットンハウスはウィスコンシン州のケノーシャの路上でブラック・ライブズ・マターに関する運動のデモ参加者に発砲し、うち2人を射殺し、1人に負傷を負わせた10代の少年である。発砲事件後、リットンハウスの周辺に形成されたコミュニティは米国の保守派アクティヴィズムと大きく重複している。これらのグループの主導者はブラック・ライブズ・マター運動の政治的なメッセージングに対抗しようとする運動と関連するグループで、憲法修正第2条に基づいた武器の保有を支持し、米国における国家主義者（自称愛国主義者）運動を推進している。現代の共和党はこれらグループのイデオロギーと政治的目標のルートの役割を果たしている。リットンハウスを取り巻く政治的なアクティヴィズムはイデオロギーというよりはむしろ国家主義者の社会・政治的グループが大きな親近感を感じる多くの異なる運動を統一する美学である。リットンハウスのミームは特定のミーム制作者コミュニティというよりはむしろミーム制作者コミュニティの収斂を表している。

これらのコミュニティは異なった方法で視聴者と仲間同士で関わり合いを持つ。視聴者への訴えは政治的、文化的その他様々な経路のアイデンティティと世界観を使って行われる。反動的運動はしばしば本質的に排他的である。したがって関係者はアウトグループを特定し、標的を絞る傾向がある。最後に、これらの関係者はしばしば暴力を推進し、政敵に対する暴力を明確に支持したり、対抗するグループによる暴力を非難し、浮き彫りにする。

6 Magdalena Wojcieszak, "False Consensus Goes Online: Impact of Ideologically Homogeneous Groups on False Consensus", *The Public Opinion Quarterly* vol. 72, no. 4 (2008): 781-91; J. David Gillespie, "Doctrinal Parties 2: The Neo-Nazis", 書名 *Challengers to Duopoly: Why Third Parties Matter in American Two-Party Politics* (University of South Carolina Press, 2012), 188-99, <https://doi.org/10.2307/j.ctv6wgjrr.16>.

7 George Hawley, "The Alt-Right Returns", 書名 *Making Sense of the Alt-Right* (Columbia University Press, 2017), 67-90, <http://www.jstor.org/stable/10.7312/haw/18512.7>; Thomas J. Main, "The Emergence of the Alt-Right from The Rise of the Alt-Right", 書名 *The Rise of the Alt-Right* (Brookings Institute Press, 2018), 3-10.

8 Maggy McDonel および Joanna Bouras 共著, "White Supremacist Graffiti Found on NKU's Campus for Second Time This Year", <https://www.fox19.com>, アクセス日 2021年11月2日, <https://www.fox19.com/2021/04/03/white-supremacist-graffiti-found-nkus-campus-second-time-this-year/>.

9 Greg Myre, "Deadly Connection: Neo-Nazi Group Linked To 3 Accused Killers", NPR, 6 March 2018, sec. National Security, <https://www.npr.org/2018/03/06/590292705/5-killings-3-states-and-1-common-neo-nazi-link>; David Neiwert, "Neo-Nazi 'Active Clubs' Spring up around Country as Handiwork of Notorious Fascist Living Abroad", Daily Kos, アクセス日 2021年11月2日, <https://www.dailykos.com/story/2021/9/28/2054946/-Notorious-neo-Nazi-organizes-fascist-fight-clubs-in-U-S-while-evading-the-law-traveling-abroad>.

10 Amanda Holpuch, "Stephen Miller: The White Nationalist at the Heart of Trump's White House", *The Guardian*, 2019年11月24日, sec. US news, <https://www.theguardian.com/us-news/2019/nov/24/stephen-miller-white-nationalist-trump-immigration-guru>; Jean Guerrero, "The Man Who Made Stephen Miller", POLITICO, アクセス日 2021年11月2日, <https://www.politico.com/news/magazine/2020/08/01/stephen-miller-david-horowitz-mentor-389933>; Jonathan Blitzer, "How Stephen Miller Manipulates Donald Trump to Further His Immigration Obsession", *The New Yorker*, 2020年2月21日, <https://www.newyorker.com/magazine/2020/03/02/how-stephen-miller-manipulates-donald-trump-to-further-his-immigration-obsession>.



お問い合わせ

ご質問、お問い合わせおよび本レポートの追加コピーに関しては以下にお問い合わせください。

ICSR
King's College London
Strand
London WC2R 2LS
United Kingdom

T. **+44 20 7848 2098**
E. **mail@gnet-research.org**

Twitter: **[@GNET_research](https://twitter.com/GNET_research)**

GNET のその他の出版物同様に、本レポートは GNET のウェブサイト www.gnet-research.org から無料でダウンロードできます。

© GNET